

20:1 さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来了。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。 20:2 それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」 20:3 そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。 20:4 ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。 20:5 そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。 20:6 シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、 20:7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。 20:8 そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。 20:9 彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。 20:10 それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。 20:11 しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。 20:12 すると、ふたりの御使いが、イエスのからだがかかっていた場所に、ひとり頭のところ、ひとり足のところ、白い衣をまとってすわっているのが見えた。 20:13 彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」 20:14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。 20:15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。」 20:16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)」とイエスに言った。 20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」 20:18 マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたことと弟子たちに告げた。 20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のものであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」 20:20 こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。 20:21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」 20:22 そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。 20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」 20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。 20:25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところ差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。 20:26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。 20:27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」 20:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」 20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」 20:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。 20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

復活したイエスがご自身を現される話で、ヨハネの福音書のこの部分が終わります。  
これは、11章に登場するラザロの復活と関連付けられています。  
12-19章におけるヨハネの福音書のメインテーマは永遠のいのちです。  
イエスの死によって、それが可能となりました。

イエスの死が成し遂げた事柄がいくつかあります。

1. イエスに敵対する人々に対して、裁きが下る。サタンは追放され、多くの人々がイエスのもとに引き寄せられる。

ヨハネ12：31-32 12:31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。12:32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」

2. イエスにご自身の民のために天で場所を備えに行くことがおできになる。

ヨハネ14：1-3 14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

3. イエスの死によって、地上にいる人々が御父を知ることができるようになる。

ヨハネ 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

4. イエスの死によって、主の民が洗いきよめられる。後に、永遠のいのちをもたらすために、聖霊が御父から民に遣わされる。

ヨハネ14：15-21 14:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。14:20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」

5. 聖霊は、イエスが教えてくださったすべてのことを使徒たちに思い起こさせる。それにより、彼らの語るメッセージは正確で、人々を永遠のいのちへと導き得るものとなる。

ヨハネ14：25-26 14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

これ以上の啓示はもはや必要ありません。

20章は、単にイエスの生と死、そしてよみがえりの話が終わる個所ではありません。それ以上のことが記されています。

20章は、読み手や聞き手に、イエスについてどう考えるかという決断を迫ります。イエスはご自身が約束なさったすべてのことを成し遂げられました。今度は、私たちがイエスについてどう考えるか心を決める番です。

イエスは福音書をとおして今日の私たちに語られます。福音書で約束された祝福のすべては、そのことばを聞いて信じる人たちに与えられると。(ヨハネ20：30-31)

では、ヨハネが語るイエスの復活の話を学んでいきましょう。

### 1. ペテロ (1-10節)

ペテロはユダヤ人を恐れたため、3度もイエスを知らないと言ってしまいました。

しかし、イエスの復活を目撃し、その恐れは勇気に変えられました。

ヨハネ20：6-7 20:6 シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、20:7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。

7節にとっても重要なことが記してあります。昨年もお伝えしましたが、改めてお伝えします。頭に巻かれていた布は、離れた場所に巻かれたままになっていました。なぜでしょう。

当時のユダヤ人の習慣で、食事の場所に不満がある場合、ナブキンを一定の形にたたむのは、その場所が気に入らないのでそこを出たいと一緒にいる友人たちに知らせるしるしでした。この習慣を今も守るユダヤ人もいます。

イエスは、ご自身が本当に死からよみがえったことを弟子たちに知らせるしるしを残されました。

このしるしは、ユダヤ人の習慣を知らない私たちには明らかではありませんが、ペテロにとっては大きな励ましとなりました。ペテロは恐れから解放され、勇気を得ました。

救い主としてイエスを受け入れ、愛しているなら、私たちも死を恐れる必要はありません。イエスを信じて亡くなる人はいつの日か死からよみがえると聖書は約束します。

### コリント第一15：19-23

15:19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。15:21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。15:22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。15:23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。

自分自身の復活についてイエスから直接励ましを受けなくても、私たちは聖書の約束を信じることができます。

何年か前のことですが、私は危篤状態の男性を訪ねました。その男性には3人の娘さんがいました。ふたりはクリスチャンでひとはノンクリスチャンでした。彼は聴覚障害者で補聴器を使っていたのですが、危篤状態だったので、看護師が補聴器を外していました。亡くなる直前に彼を訪ねたとき、娘さんが私を廊下に連れ出して言いました。「父は耳が聞こえません。でも、補聴器もしていないのに、私が普通に話してもその問いに遠くからでもちゃんと答えるのです。奇跡です。」これに対して、お父さんの亡くなる前に充実したときをいっしょに過ごすことができるように、神がこの奇跡を起こしてくださったのだ、と私は答えました。そして、お父さんの証をとおしてイエスを信じることを娘さんにお勧めしました。

次に、復活したイエスがマグダラのマリヤに現れた話を見てみましょう。

## 2. マグダラのマリヤ (11-8節)

マリヤは、イエスが死んだことで打ちひしがれていました。マグダラのマリヤとはいったい誰でしょう。

ルカ8:2は、「悪霊」から解放された女性だと語ります。

イエスは、彼女から7つの悪霊を追い出されました。マリヤは感謝の気持ちでイエスについていきました。

11節には、マリヤが墓の外で泣いていたと語ります。御使いたちが話しかけても、彼女はまだ泣いていました。

そして今度は、イエスがマリヤに話しかけましたが、彼女はまだ泣いていました。マリヤは悲しみのあまり、イエスが復活して現れてくださったのに、その姿をもう少しで見逃すところでした。

しかし、イエスがマリヤの名を呼ぶと、彼女はその声にすぐ気づきました。マリヤの涙は喜びに変えられました。復活したイエスに会えて大喜びしました。この個所の大切なポイントが17節にあります。

イエスが御父のところに戻られるというメッセージを使徒たちのところに行って伝えるようにと、マリヤはイエスから言われました。

ヨハネ20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」

18節で、マリヤは言われたとおり、弟子たちにメッセージを伝えました

このメッセージの重要性は、ヨハネの福音書全体に照らして初めて理解できます。

ここで気づくべきことは、イエスがマリヤや弟子たちに示しておられる新しい関係性です。「あなたがたの父…あなたがたの神」は、新しい関係性を示します。

これが復活の話だけにとどまるなら、上の階の広間でイエスがおっしゃったことがすべて成就したと使徒たちを説得するのに十分な根拠だったでしょう。

イエスは、ご自身が言ったとおりのお方でした。そして、ご自身がなさるとおっしゃったことをすべて成し遂げられました。

けれども、私たちが聖書を読むとき、細部にまで注意を払うことが大切です。聖書に記されたすべてのことばは、神が目的をもってそこに置かれたのです。

聖書を読んでいて、何か気になる個所があれば、そのことについてじっくり考える必要があります。それは、神が教えようとしておられることをしっかり受け止め、たましいの益とするためです。

## 3. 使徒たちがよみがえったイエスと出会う。(19-23節)

ヨハネは20節で、イエスが弟子たちにご自身の手とわき腹をお見せになったと語ります。

そうなされたのは、弟子たちに十字架の出来事を思い起こさせるためです。よみがえられた主イエスは、十字架にかかれたキリストと同じお方です。

この個所にはおもにふたつのテーマがあります。確信を与えることと、使命をもって送り出すことです。

a) 確信を与える。— イエスは弟子たちに「平安があなたがたにあるように。」とおっしゃいました。そして、彼らに息を吹きかけて、ご自身の死が成し遂げたすべてのことを弟子たちに思い出させます。イエスは世の罪を取り除く神の子羊でした。

神の怒りが罪の罰を下し、聖霊が注がれるのです。

「平安があなたがたにあるように。」というのは、ユダヤ人の日常の挨拶でしたが、イエスはこれを繰り返し言うことで、弟子たちが平安を忘れないようになさいました。

この世はイエスを憎んでおり、弟子たちのことも憎むようになるからです。イエスはご自身の死と復活をとおして、弟子たちの赦しを勝ち取られました。この世に打ち勝ち、弟子たちの居場所を天に確保なさいました。弟子がイエスにとどまるなら、内住の聖霊のご臨在のおかげで、彼らは約束された平安を得ます。

22節で、弟子たちに聖霊を吹きかけられた出来事は、使徒2章の五旬節で聖霊のバプテスマを受けた出来事とは別であることを認識しておくのが大切です。

創世記2章で、神は初めの人に息を吹きかけていのちを与えられました。その個所では、この22節でヨハネが使ったのと同じヘブル語の単語が使われています。創世記2章の神の息吹は肉体の命を与え、「新しく造られた者」に対するイエスの息吹は霊のいのちを与えました。

使徒たちは後に聖霊のバプテスマを受けます。イエスはここで、後に受けるものを前もって味わわせてくださったのです。

- b) 使命をもって送り出す。—23節は長年、難しい個所とされてきました。誤った解釈をすると、使徒たちが罪を赦す権威があるように読みとれます。しかし、聖書からそうではないことがわかります。罪を赦す権威をお持ちなのはイエスだけです。(マルコ2:7)

非常に有能なギリシャ語学者ジュリアス・マンテイ博士は、この個所のギリシャ語の正しい解釈を教えてください。

「誰でも罪を犯してあなたが赦すなら、その人はすでに赦されています。誰でもあなたが赦さない（そのまま残す）なら、その人はまだ赦されていません。」

つまり、弟子たちは福音のメッセージを土台として「赦し」を提供するということです。

弟子たちは、福音のメッセージを受け入れる人々に赦しを宣言するのです

ですから、弟子たちの務めは、福音を告げ知らせることです。もし人々がそれを受け入れるなら、その人たちは赦され、人々が福音を拒絶するなら、その人たちの罪はそのまま残るということです

では、24-29節から、復活のイエスが姿を現される最後の話に進みましょう。

#### 4. よみがえりのイエスがトマスに姿を現される。(24-29節)

28節に登場するトマスの応答は、この福音書のクライマックスと言えます。

ヨハネ20:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」

トマスは、イエスを主であり神であると信じました。

これは、読み手にとって模範とするべき応答です。私たちがイエスを主であり神であると信じなければなりません。

トマスは最初、使徒たちの目撃証言を信じようとしませんでした。

ヨハネ20:25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。

しかし、トマスの疑念は信仰へと変えられました。

イエスが復活なさった日の夜に他の弟子たちはイエスに会いましたが、なぜトマスはそこにいなかったのでしょうか。

あまりの失望に、仲間と一緒にいたくなかったのでしょうか。

そうかもしれませんが、私たちはそうならないように気をつけましょう。

失望する時、敗北感や喪失感に襲われる時、いつもに増して友人が必要です。ひとりにな

ると、落胆した気持ちが一層深まるだけです。  
元気がないときも人を避けないで、兄弟姉妹の交わりにいるよう心がけましょう。たいへんなときにお互い支え合うよう私たちは召されています。  
イエスは弟子たちに姿を現されましたが、トマスは会い損ねてしまいました。イエスにお会いするのに少なくとも8日間待たなければなりませんでした。  
私たちは、主日に神の家族と会い損ねてはいけないことを、トマスから学ぶべきです。

ヘブル10：22-25 10:22 そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。 10:23 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。 10:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。 10:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。

家にいて教会に来ないと、神の家族とともに過ごし、神のみことばを聞き、兄弟姉妹とともに礼拝するという祝福を逃してしまいます。  
イエスは、トマスを厳しく叱責したりはなさいませんでした。みことばから、トマスはとても勇気のある人であったことがわかります。

ヨハネ11：16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

トマスはまた、真理を知ることが望む霊的な人でした。

ヨハネ14：4-6 14:4 わたしの行く道はあなたがたも知っています。」 14:5 トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

疑いと不信仰は別物であることが、トマスの言葉からわかります。  
疑いは、「問題が多すぎて信じられない。」という状態なのに対し、不信仰は、「証拠を見せてくれない限り、私は信じない。」という状態です。  
このギリシャ語の表現には、二重否定が含まれていて、「私は断じて信じない」という意味です。

誰に教えてもらわなくても、イエスはこのトマスの言葉をお聞きになりました。  
イエスはとても優しく寛容なお方です。そんなトマスの状態に合わせて、トマスが言ったとおり証拠を見せてくださいました。(27節)  
疑いを持つひとりの弟子にイエスが心を配ってくださったことは、私たちにとっても励みになります。

イエスは、トマスを元気づけ、今後与えられる祝福に積極的に与えるようにしてあげたいと思ってくださいました。

不信仰は、神からの祝福を私たちから奪うものです。  
聖書をすべて鵜呑みにせず、神のみことばに疑問を持つことは知性的なように見えますが、実際、たいていの場合はそれは「頑なな心」の表れです。

私たちは、すべての人間が何らかの「信仰」によって生きていることを覚えておく必要があります。

何を信仰の対象にするかの違いだけです。

クリスチャンは、神と神のみことばに信仰を置きますが、ノンクリスチャンは自分自身に信仰を置きます。

あなたは今日、何に信仰を置きますか。神のみことばである聖書でしょうか。それとも、自分自身でしょうか。

30-31節で、ヨハネはこの福音書全体を要約します。この福音書を書いた目的は、私たちがイエスを神の御子キリストと信じるため、そして、私たちがこのお方においていのちを得るためだとヨハネは語ります。

この要約はふたつの部分に分けられます。

まず、「新しいいのち」を得るためには、聖書が教えるイエスを信じなければなりません。次に、イエスのことばを聞き続けなければなりません。それは信仰が成長し、クリスチャンとしての信仰を貫くためです。

## 適用

1. ヨハネは、イエスが死からよみがえり、肉体のかたちで復活されたことを示す十分な証拠を文書で提供してくれます。

これは、私たちがイエスを信じるなら、いつの日か肉体の復活に与ることを意味します。今の身体とは違って、すべてにおいて完ぺきな体を得ます。この新しい体に死や老化はありません。罪や病の支配を受けないのです。

2. 私たちの罪に対する神の御怒りから人類を救う神のご計画が成就したことを私たちは確信できます。

神の赦しを確実なものとするために、これ以上できることは何もありません。神ご自身が御子の死を私たちの罪の代価として受け入れてくださったからです。私たちはただ信じて赦しを受け取ればよいのです。これはすばらしい知らせです。というのは、キリスト教が宗教ではなくなるからです。キリスト教は、イエスがしてくださったことに基づく関係性であり、私たちの働きが土台ではありません。

宗教は人の努力がベースであるのに対し、キリスト教はすでになされた御業を信じることです。

今日ぜひ、イエスのしてくださったことを信じてください。